

飼料用とうもろこし及び飼料用ソルガムにおけるツマジロクサヨトウ防除対策について

○幼虫の特徴 (若齢幼虫(ふ化して間もない小さい幼虫)を発見した場合は、老齢幼虫(さなぎになる前の大きい幼虫)を探すか病害虫防除所に相談すること)

実際の大きさ
(老齢幼虫)



※体色には変異あり

虫ふん



排出直後は球形に近い。色は様々。

頭部



淡色の『逆Y字』紋がある。
淡褐色の網目模様がある。

尾部

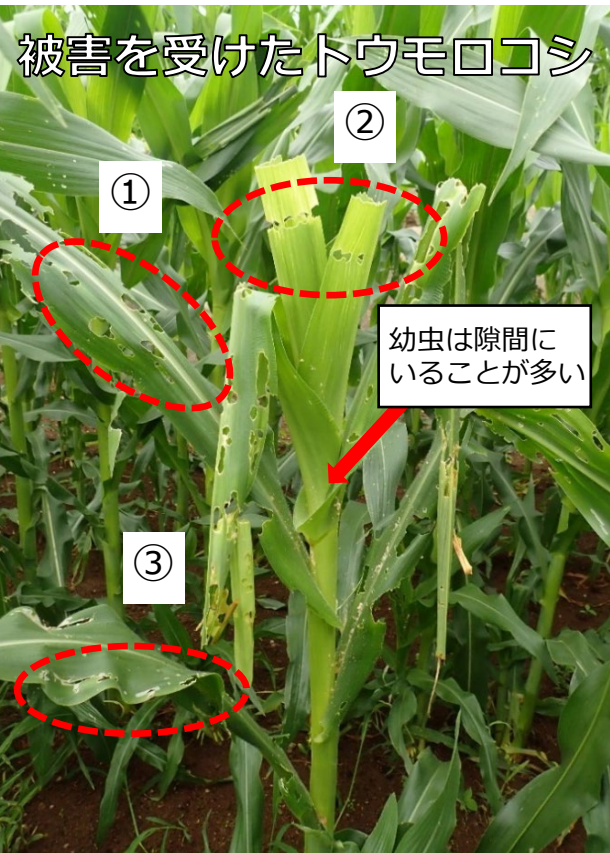


大きな黒斑がある。

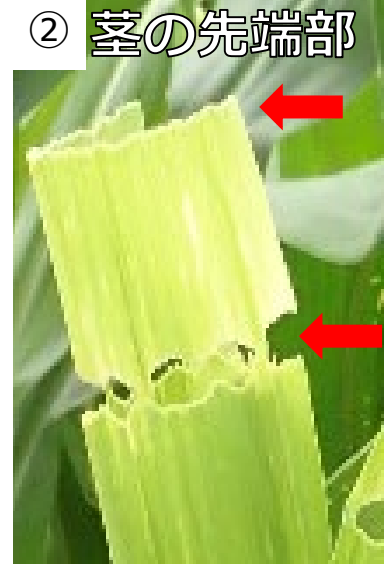
体長が約2cm以上の幼虫で見られる特徴

○食害の状況 (両作物とも同様の食害状況を示す)

★ツマジロクサヨトウは、若くて柔らかい部位を好んで食害する



不定形の穴が多数開く。



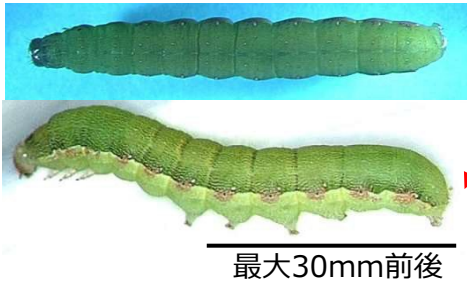
先端部の葉に穴が一行にあき、切断されることもある。



表面が若齢幼虫により食害され、片側の表皮が白く残る。

○ツマジロクサヨトウと本作物で見られる他の幼虫の違い

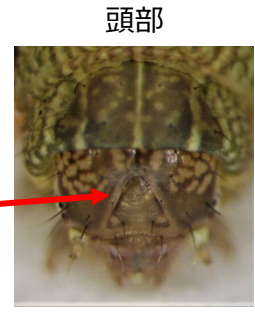
◆ シロイチモジヨトウ



最大30mm前後

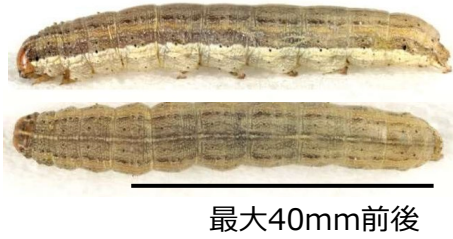
顕著な黒斑なし

「淡色の逆Y字紋」なし
(あっても薄くて不明瞭)



頭部

◆ アワヨトウ



最大40mm前後

顕著な黒斑なし



正面に2本の黒帯

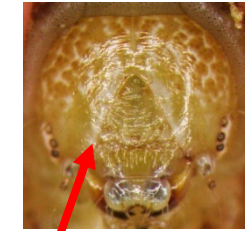
頭部

◆ オオタバコガ



最大40mm前後

体の表面に小さなトゲが多数ある
(虫眼鏡等で拡大)



「淡色の逆Y字紋」なし
(あっても細いか、不明瞭)

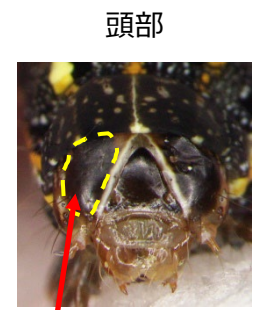
頭部

◆ ハスモンヨトウ



最大40mm前後

三角形の黒斑が並ぶ (部分的に消失する場合あり)



大きな黒斑

頭部

◆ アワノメイガ



最大20mm前後



一様に黒褐色

幼虫写真の下の黒線は実際の大きさを示す

頭部

1. 調査方法

ほ場におけるツマジロクサヨトウの調査は、幼虫が葉などを食害した痕や虫ふんなどの有無を確認することにより行う。

幼虫による被害は、ほ場内の一部のみが発生することがあるため、可能な限り、ほ場内に立入り、ほ場全体を広く目で見て調査する。

2. 早期発見

生育初期に幼虫に食害されると被害が大きくなるため、ほ場を定期的（週1回程度が望ましい。）に見回り、早期発見に努める。

（注）ツマジロクサヨトウと疑われる虫を発見した際は、速やかに病害虫防除所や普及指導センター等に連絡してください。

3. 農薬散布

農薬散布が可能なほ場では、登録農薬による防除を実施する。登録農薬については、最新の農薬登録状況を確認し、農薬使用基準を順守する。散布にあたっては、新葉の葉しょう基部に潜り込んでいる幼虫に届くよう、株の上部までしっかりと散布する。

なお、周辺作物への農薬の飛散（ドリフト）には十分注意する。

老齢幼虫になると農薬の効果が低下するため、可能な限り、若齢幼虫のう

ちに防除することが望ましい。

（注）農薬の使用に当たり、不明なことがある場合には、病害虫防除所や普及指導センター等関係機関に相談してください。

4. 農薬による防除が困難な場合

草丈が高く農薬散布が困難な場合や隣接ほ場へのドリフトが懸念される場合は、次の取組を実施する。

（1）早期刈取り

① 収穫が可能な場合は、直ちに収穫・調製を行う。

② 刈取り後は、土の上に落ちた幼虫や土中のさなぎを駆除するため、速やかに耕うんする。

（2）すき込み

直ちに収穫が困難な場合は、被害の拡大や虫の分散等を防止するため、

① 速やかにすき込みを実施する。

② すき込みの実施にあたっては、幼虫やさなぎを破砕、又は土中深くに埋没するよう、土の表面に作物が見えなくなるまで深くすき込み（深さの目安12cm以上）を2回以上行う。

5. 前作に発生が確認されたほ場等における防除

（1）土壌中にさなぎが残存している可能性があるため、刈取り後は速やかに複数回の耕うんを行い、残存害虫を駆除してから播種する。

（2）生育初期に幼虫に食害されると被害が大きくなるため、ほ場を定期的に見回り、早期発見に努め、発生を確認したら直ちに農薬散布等を行う。

（3）前作に発生が確認されたほ場の周辺ほ場においても、定期的に見回りを

行い、早期発見、早期防除に努める。